

うわのいせき
14. 上野遺跡

所在地：勝山市北郷町伊知地 5-3

調査原因：消火用ポンプ (①)

・防火水槽設置工事 (②)

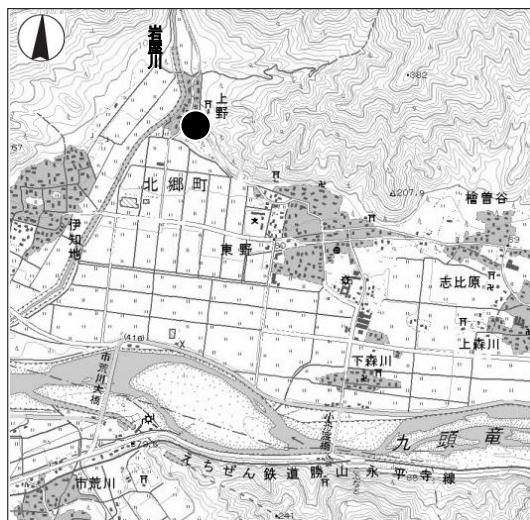
調査期間：平成 30 年 9 月 21 日～11 月 1 日

調査主体：勝山市教育委員会

調査面積：151.5 m² (①：48 m²、②：103.5 m²)

時代：縄文時代後期～晩期・平安時代・

室町～江戸時代



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 遺跡が所在する北郷町は、勝山市の西端に位置し、西は岩屋川、南は九頭竜川に挟まれ、これらの河川の氾濫原を避けた台地上に立地します。また、上野遺跡が立地する上野地区には、国重要文化財の指定を受けた旧木下家住宅が所在します。木下家は、代々甚右衛門を名乗っていた旧家でした。建物は入母屋造の茅葺きで、永平寺大工が手がけた江戸時代後期の庄屋の屋敷です。建築後約 180 年が経過していることから建物全体がゆがみ、雨漏りなども発生していたので、文化庁や福井県の補助を受けて、平成 27～30 年 (2015～2018) までの 4 か年計画で半解体修理や便宜防災施設整備工事を行いました。本調査は、この事業に関連した消火用ポンプや防火水槽設置に伴い実施しました。消火用ポンプ設置場所は建物周辺の敷地内、防火水槽設置場所は駐車場として利用する更地にあたります。

当遺跡は、市指定文化財の「御物石器」が出土した縄文時代を中心とする遺跡です。先の 1・2 次調査でも縄文時代後期末から晩期の遺物が多量に出土しましたが、生活の痕跡を示す遺構は未確認でしたので、縄文時代の遺構発見が課題でした。先の調査や試掘調査の結果から遺構が残存する可能性があるかと判断されたため記録保存として発掘調査を行いました。

遺構 敷地内からは縄文時代の土坑、小穴、集石遺構、炉跡 (土器敷き)、柱穴、室町時代の土坑など、駐車場からは縄文時代の自然流路、集石遺構などが検出されました。炉跡は、遺



炉跡の全景 (右：土器検出、左：完掘状況)

構面 (地山面) が被熱による影響で赤褐色を呈し、その上に縄文を施文した土器片が集中して出土しました。集石遺構は、黒褐色土の遺構面で発見しましたが、土の色調が黒色を基調とするため遺構プランは不明瞭でした。しかし、石器 (磨石、台石) と未加工の河原石が縄文土器と共に集中して見つかりました。

駐車場で発見された自然流路は、肩部 (左岸側) から川底までが検出され、右岸側の肩部は調査区外にあると推定されます。流路内の覆土は、自然に堆積したものと、洪水によるも

のがあることが断面で確認できました。洪水層の上面に縄文時代の生活痕跡と想定される集石遺構や土坑がみられ、その後、徐々に自然流路の川幅が狭くなり谷部が埋没したと考えられます。覆土から縄文土器等が多量に発見され、川底付近には後期末、上層付近に晩期の時期と考えられる土器が集中していました。

遺物 縄文時代後期末から晩期の縄文土器や石器、平安時代の土師質土器や須恵器、室町時代の越前焼、瀬戸美濃焼、かわらけ、江戸時代以降の越前焼、唐津焼、銅銭、鉄製品などが出土し、総数は約500点を数えます。遺物は、縄文時代の土器片が最も多く出土しました。

まとめ 本調査区は、旧木下家住宅の敷地内と道路を挟み東側の駐車場からなる2地区です。敷地内は、調査区の幅が1.2mと狭く、遺構の詳細な検討はできませんでしたが、木下家住宅は旧地形である斜面の山側（北側）を削平して平坦面を形成していたことが改めて確認され、縄文時代の遺構は、削平の影響を受けていない川側（南側）の標高が低い方（建物の正面玄関）に分布していることが判明しました。また、敷地内と駐車場の間にある市道は旧地形が谷部で、縄文時代には小川が流れ、晩期の頃に埋没したことが確認できました。また、縄文時代、そして平安時代時代以降には、土地の開墾がさらに進み、地形をうまく利用しながら村落をつくっていることがわかりました。今後の発掘調査で集落の中心が発見されることが期待されます。

（藤本康司）



自然流路完掘状況（南から）



集石遺構の検出状況（西から）



遺構完掘1（西から）



遺構完掘2（西から）